

- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲
- : 保全すべき種確認位置（春季）

注) () 内の数字は、確認例数を示す。

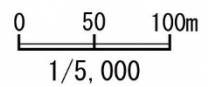






図 9.8-5(4) 保全すべき種の確認位置（爬虫類・両生類：春季）

表 9.8-15(1) 保全すべき種の生態及び確認状況（爬虫類）

科名	カナヘビ科							
種名	カナヘビ							
重要性	文化財	—						
	保存法	—						
	環境省	—						
	埼玉県	<table border="1"> <tr> <td>全県</td> <td>地帯別危惧</td> </tr> <tr> <td>大宮台地</td> <td>準絶滅危惧 2 型</td> </tr> <tr> <td>中川・加須低地</td> <td>準絶滅危惧 2 型</td> </tr> </table>		全県	地帯別危惧	大宮台地	準絶滅危惧 2 型	中川・加須低地
全県	地帯別危惧							
大宮台地	準絶滅危惧 2 型							
中川・加須低地	準絶滅危惧 2 型							
分布状況	北海道、本州、四国、九州							
形態・生息場所	<p>【形態】 頭胴長 5～7cm</p> <p>【主な生息環境】 低地から山地にかけて広範囲に生息するが、低地や丘陵地で多く見られる。草むらなど日当たりのよい場所を好み、公園の緑地、水田の畦、人家の生け垣、畑地など人為的な環境にも適応している。</p>							
県内での生息状況	<p>台地・丘陵地を中心に低山帯から低地帯まで広く分布しているが、緑地面積の減少による生息適地の減少、道路等造成に伴う生息地の分断などによって、個体数の減少がみられる地域がある。都市化の進行している県南部、大規模開発が盛んな県東部ではこの傾向が顕著である。</p>							
現地確認状況	<p>夏 季：対象事業実施区域外の住宅地の道路上、綾瀬川の堤防上、綾瀬川堤防の草地等で計 5 例が確認された。</p> <p>秋 季：綾瀬川堤防の草地等の対象事業実施区域外で計 4 例確認された。</p> <p>春 季：対象事業実施区域内の草地 2 箇所計 2 例（成体）、対象事業実施区域外の水路沿いで 1 例（成体）、クワイ畑で 1 例（成体）、計 4 例が確認された。</p>							


資料：「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）」（平成 30 年、埼玉県）

表 9.8-15(2) 保全すべき種の生態及び確認状況（爬虫類）

科名	ヘビ科							
種名	シマヘビ							
重要性	文化財	—						
	保存法	—						
	環境省	—						
	埼玉県	<table border="1"> <tr> <td>全県</td> <td>絶滅危惧Ⅱ類</td> </tr> <tr> <td>大宮台地</td> <td>絶滅危惧Ⅱ類</td> </tr> <tr> <td>中川・加須低地</td> <td>絶滅危惧Ⅱ類</td> </tr> </table>		全県	絶滅危惧Ⅱ類	大宮台地	絶滅危惧Ⅱ類	中川・加須低地
全県	絶滅危惧Ⅱ類							
大宮台地	絶滅危惧Ⅱ類							
中川・加須低地	絶滅危惧Ⅱ類							
分布状況	北海道、本州、四国、九州							
形態・生息場所	<p>【形態】 全長 80～200cm</p> <p>【主な生息環境】 低地から山地まで広く生息し、日当たりの良い水田、草むら、畑地、沼地等の周辺を好む。餌はカエル、トカゲ、鳥類、哺乳類など食性は広いが、カエルに依存する傾向が強い。昼行性で採餌や日光浴のため水田やその周りでみかけることが多く、人目にふれやすい種である。</p>							
県内での生息状況	<p>低地帯から山地帯にかけて生息している。普通にみられる種とされていたが、近年、関東平野とその周辺では減少が著しい。近県の東京都や千葉県でも減少が指摘され、県内でも個体数は少ないと考えられる。餌資源と生息適地が多い台地・丘陵帯で生息記録が少なく、特に秩父地方で少なかった。低地帯での生息記録は加須低地を中心にみられたが、水田の減少、圃場整備、水路のコンクリート化等によりカエル等の餌資源の減少が顕著である。</p>		確認个体					
現地確認状況	<p>早春季：対象事業実施区域外の水田で1例が確認された。</p> <p>春季：対象事業実施区域外の綾瀬川の堤防の草地で1例（成体）が確認された。</p>		確認環境					



資料：「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第4版）」（平成30年、埼玉県）

表 9.8-15(3) 保全すべき種の生態及び確認状況（爬虫類）

科名	ヘビ科							
種名	アオダイショウ							
重要性	文化財	—						
	保存法	—						
	環境省	—						
	埼玉県	<table border="1"> <tr> <td>全県</td> <td>準絶滅危惧 2 型</td> </tr> <tr> <td>大宮台地</td> <td>準絶滅危惧 1 型</td> </tr> <tr> <td>中川・加須低地</td> <td>準絶滅危惧 2 型</td> </tr> </table>		全県	準絶滅危惧 2 型	大宮台地	準絶滅危惧 1 型	中川・加須低地
全県	準絶滅危惧 2 型							
大宮台地	準絶滅危惧 1 型							
中川・加須低地	準絶滅危惧 2 型							
分布状況	北海道、本州、四国、九州		確認個体					
形態・生息場所	<p>【形態】 全長 110～200cm</p> <p>【主な生息環境】 低地から山地まで広く生息し、森林、水田、住宅地まで様々な環境に適応している。樹上性が強く、鳥類のヒナや卵、ネズミ類を好み、幼蛇はカエルやトカゲを餌とするため、これら餌資源が豊富な里山環境は生息適地といえる。昼行性で人家（特に木造家屋）にもよく棲みつき、人目にふれやすい種である。</p>		 <p>確認環境</p>					
県内での生息状況	<p>低地帯から山地帯まで広く生息している。低地帯では、都市化等が進行した県南部、大規模開発が盛んな県東部は、建物構造の鉄骨化、鉄筋化により生息環境や餌資源が減少している。緑地公園、屋敷林や社寺林に囲まれた住宅や寺社等の存在により辛うじて個体群が維持されていると考えられる。生息適地の多い台地・丘陵帯でも大規模開発の影響だけではなく、小規模でも道路の舗装化や直線化などによりロードキルを誘発し、個体数減少につながっていると考えられる。</p>							
現地確認状況	<p>夏 季：対象事業実施区域外の綾瀬川を泳ぐ 1 例が確認された。</p> <p>春 季：綾瀬の森の刈り取った枝置場で 1 例（成体）が確認された。</p>							



資料：「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）」（平成 30 年、埼玉県）

表 9.8-15(4) 保全すべき種の生態及び確認状況（両生類）

科名	ヒキガエル科		 <p style="text-align: center;">確認個体</p>					
種名	アズマヒキガエル							
重要性	文化財	—						
	保存法	—						
	環境省	—						
	埼玉県	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>全県</td> <td>準絶滅危惧 1 型</td> </tr> <tr> <td>大宮台地</td> <td>準絶滅危惧 1 型</td> </tr> <tr> <td>中川・加須低地</td> <td>準絶滅危惧 1 型</td> </tr> </table>		全県	準絶滅危惧 1 型	大宮台地	準絶滅危惧 1 型	中川・加須低地
全県	準絶滅危惧 1 型							
大宮台地	準絶滅危惧 1 型							
中川・加須低地	準絶滅危惧 1 型							
分布状況	北海道（※）、本州（近畿以東） ※北海道の個体群は国内移入とされる							
形態・生息場所	<p>【形態】体長オス 43～161mm、メス 53～162mm 高標高地では小型化する</p> <p>【主な生息環境】山地から平地まで広く分布し、おもに林床で生息している。繁殖は池、湿原、湖等の浅い止水で、同じく早春に繁殖するニホンアカガエル等に比べて深い池が好まれる。</p>		 <p style="text-align: center;">確認環境</p>					
県内での生息状況	<p>亜高山帯から低山帯にかけて、山地から都市公園まで広く分布する。台地・丘陵帯から低地帯にかけて近年急速に個体数を減らしている。道路新設や宅地や工業団地造成等の大規模開発による生息地の減少がみられるだけでなく、農道・林道造成等による生息地の分断や、産卵地の護岸等の比較的小規模な開発でも影響を受けていることが考えられる。アライグマによる捕食も疑われ、個体数の減少の原因が多岐にわたっている。</p>							
現地確認状況	<p>早春季：対象事業実施区域外の綾瀬川の河川敷のビオトープ池で幼生 50 例が確認された。</p> <p>春 季：対象事業実施区域内の草地で成体の死体 1 例が確認された。</p>							

資料：「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）」（平成 30 年、埼玉県）
：「侵入生物データベース」（国立環境研究所ホームページ）

表 9.8-15(5) 保全すべき種の生態及び確認状況（両生類）

科名	アカガエル科			
種名	トウキョウダルマガエル			
重要性	文化財	—		
	保存法	—		
	環境省	準絶滅危惧		
	埼玉県	全県		準絶滅危惧 1 型
	大宮台地	絶滅危惧 II 類		
	中川・加須低地	準絶滅危惧 1 型		
分布状況	本州（東北の太平洋側〔岩手県・宮城県・福島県〕、関東地方、新潟県と長野県の一部）		確認個体	
形態・生息場所	<p>【形態】体長オス 39～75mm、メス 43～87mm。メスが明らかに大きい。</p> <p>【主な生息環境】丘陵地から平地の水田と、周辺の水路や浅い池沼、河川敷の湿地等に生息し、水辺からほとんど離れない。産卵は水田の湛水期である 5～7 月頃におこなわれ、産卵場所は水田にほぼ依存している。</p>			
県内での生息状況	<p>低山帯から低地帯にまで広く分布しているが、分布の中心は低地帯に広がる水田である。道路新設や宅地や工業団地造成等の大規模開発による水田の減少、圃場整備による暗渠排水工事や用排水路のコンクリート化等の影響を受け生息地が減少している。特に熊谷市周辺等で行われている二毛作水田では減少著しく、湛水が 6 月中下旬以降と遅く産卵期のピークを過ぎているだけでなく、中干しなどによる落水も上陸前の幼生の死亡につながり、個体数減少の原因となっている可能性がある。</p>			
現地確認状況	<p>夏季：対象事業実施区域外のクワイ畑で 5 例（鳴き声）と、道路にできた水たまりで 1 例（幼生）が確認された。</p> <p>秋季：対象事業実施区域外のクワイ畑で 2 例（幼体）が確認された。</p> <p>春季：対象事業実施区域外のクワイ畑で 1 例（成体）、水田で 3 例（鳴き声）、水路で 2 例（幼体）が確認された。</p>			

資料：「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）」（平成 30 年、埼玉県）

カ 魚類

(ア) 確認種

現地調査の結果、魚類は表 9.8-16 に示す 5 目 12 科 24 種が確認された。

調査範囲の環境は、いずれも流速の緩やかな流水環境であり、両岸はヨシ等の抽水植物がみられた。F-2 は既存施設からの排水路の合流箇所付近であり、F-1 は合流箇所よりも上流側、F-3 は合流箇所よりも下流側に位置している。

全ての調査地点において、ヌマチチブ、マハゼ、ボラ等の流速が緩やかな環境に生息する種が主に確認された。

表 9.8-16 確認種一覧（魚類）

No.	目名	科名	種名	調査地点														
				F-1				F-2				F-3						
				夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季			
1	ウナギ	ウナギ	ウナギ				●											
2	コイ	コイ	オイカワ				●			●								
3			カマツカ	●									●					
4			タモロコ											●				
5			スゴモロコ	●						●	●			●				
6			モツゴ		●					●				●				
7			ニゴイ	●	●					●	●			●		●	●	
8			コイ							●								
9			ギンブナ	●	●						●							
-					フナ属の一種				●	●				●				
10					タイリクバラタナゴ	●					●							●
11				ドジョウ	ドジョウ							●		●				
12	ナマズ	アメリカナマズ	チャネルキャットフィッシュ							●				●				
13		ギギ	コウライギギ							●								
14	メダカ	メダカ	メダカ									●	●					
15		カダヤシ	カダヤシ							●				●				
16	スズキ	ボラ	ボラ	●			●	●				●	●			●		
17		タイワンドジョウ	カムルチー							●								
18		スズキ	スズキ	●					●			●				●		
19		サンフィッシュ	コクチバス		●													
20		ハゼ	ヌマチチブ	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
21			シモフリシマハゼ						●				●					
22			アシシロハゼ							●								
23			マハゼ	●	●		●	●	●				●			●		
24			スミウキゴリ				●									●		
計	5目	12科	24種	9種	6種	0種	7種	10種	10種	3種	8種	4種	11種	2種	7種			
				14種				19種				15種						

注) 種名・配列は、基本的に「日本産野生生物目録 - 本邦産野生動植物の種の現状 - (脊椎動物編)」(平成 5 年、環境庁)に従った。

(イ) 保全すべき種

現地調査の結果、保全すべき種は、ウナギ、ドジョウ及びメダカの3種が確認された。保全すべき種一覧は表 9.8-17、調査季節別の保全すべき種の確認位置は図 9.8-6(1)～(4)、保全すべき種の生態及び確認状況は表 9.8-18(1)～(3)に示すとおりである。

なお、スゴモロコは国内他地域からの移入種であるため、保全すべき種からは除外した。

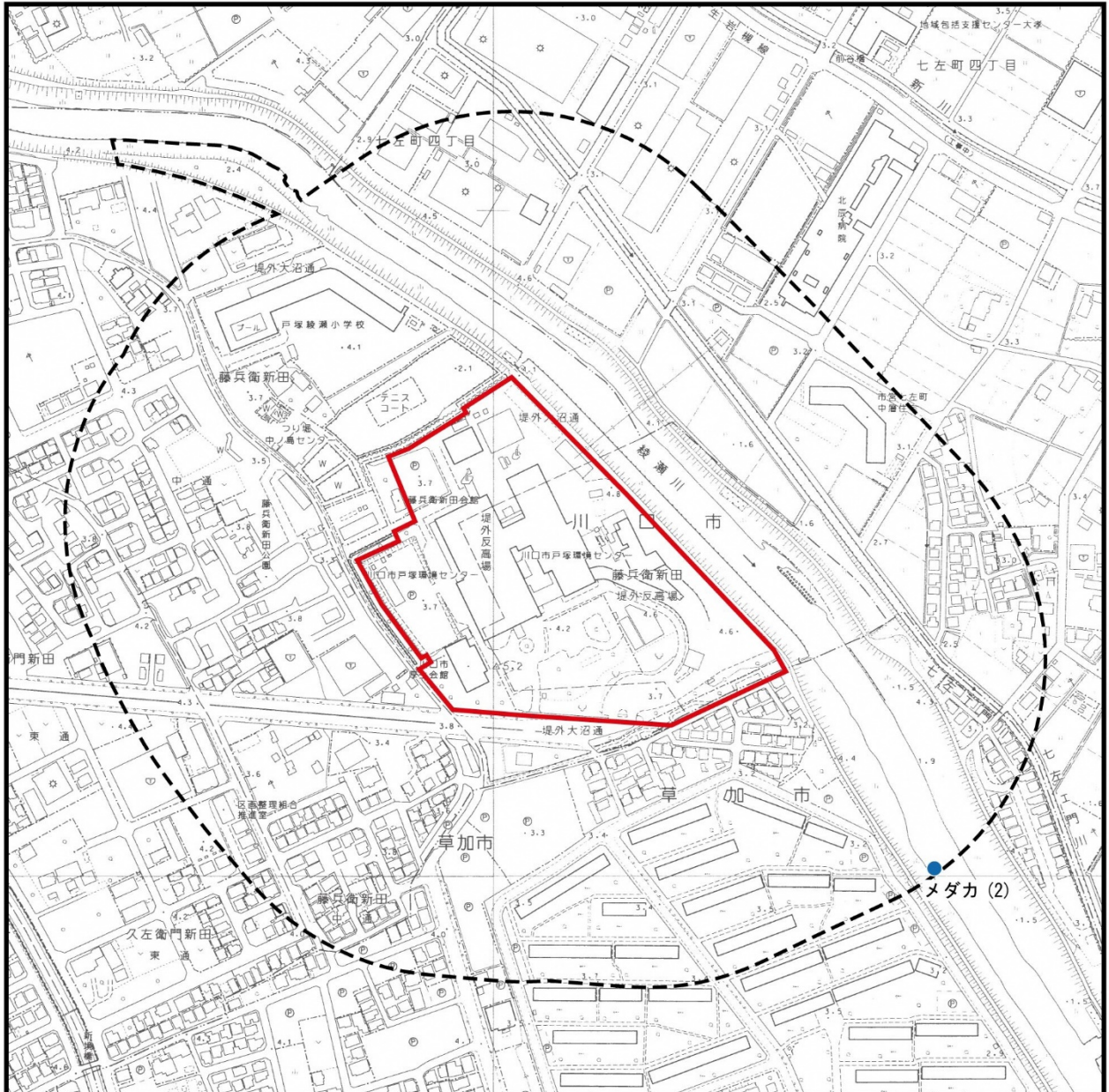
表 9.8-17 保全すべき種一覧 (魚類)

No.	目名	科名	種名	調査地点			保全すべき種の選定基準						
				F-1	F-2	F-3	文化財 保護法	種 の 保 存 法	埼 玉 県 文 化 財	埼 玉 県 保 護 条 例	2 0 1 9 環 境 省 R L	埼 玉 県 RDB 2018 全 県	
1	ウナギ	ウナギ	ウナギ	●								EN	NT2
	コイ	コイ	スゴモロコ	○	○	○						(VU)	
2		ドジョウ	ドジョウ		●							NT	
3	メダカ	メダカ	メダカ			●						VU	NT2
計	3目	3科	3種	1種	1種	1種	0種	0種	0種	0種	3種	2種	
							3種						

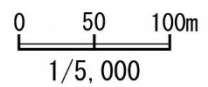
注 1) 種名・配列は、基本的に「日本産野生生物目録 - 本邦産野生動物の種の現状 - (脊椎動物編)」(環境庁、1993)に従った。

2) 保全すべき種の選定基準となる法令・文献及び評価区分は前掲表 9.8-5 のとおりである。

3) 確認状況を○で示したスゴモロコは国内他地域からの移入種であるため、保全すべき種から除外し、保全すべき種の選定基準は括弧をつけた表記とした。移入などの判断は、「侵入生物データベース」(国立環境研究所ホームページ)を参考にした。

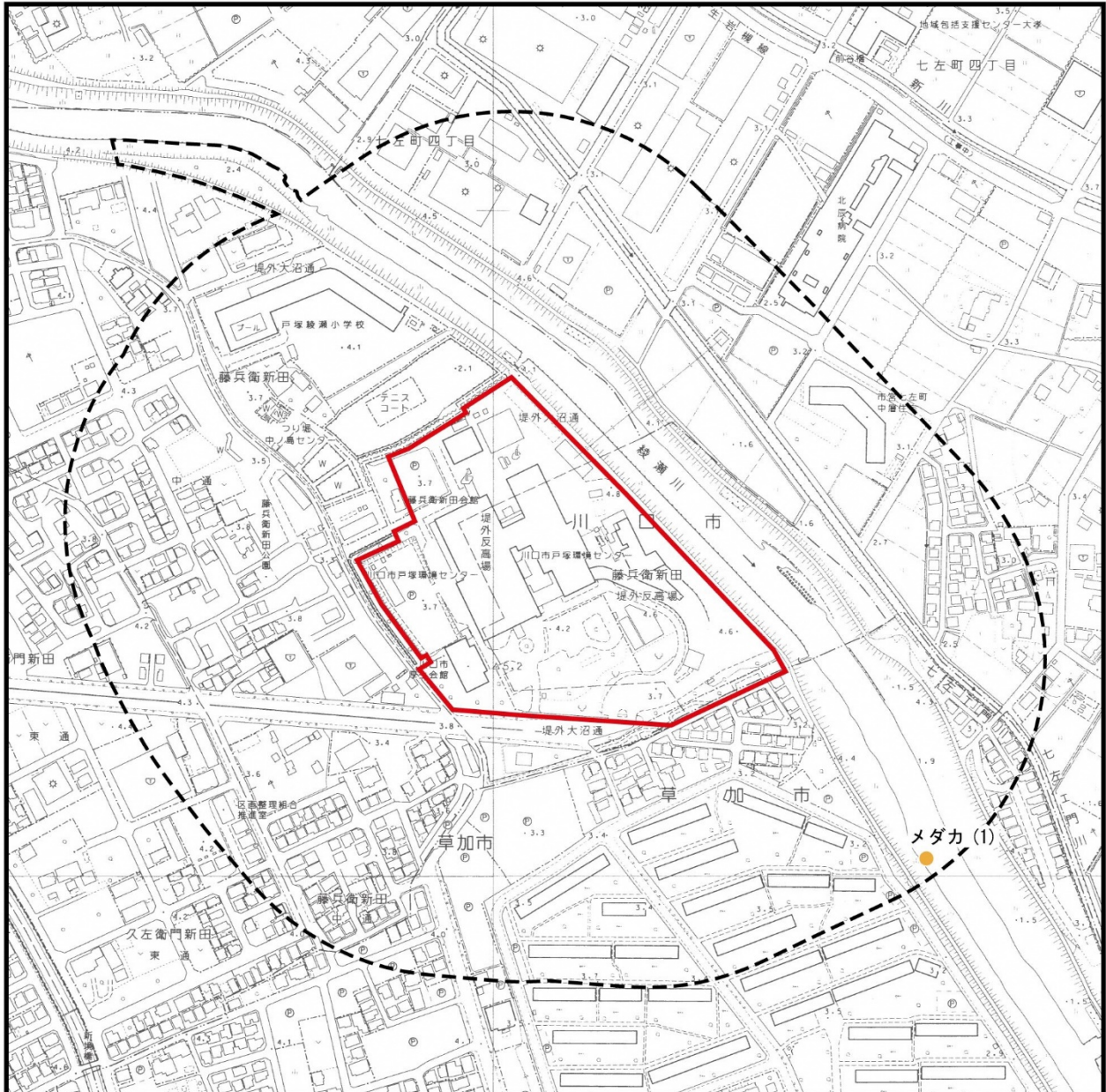


- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲
- : 保全すべき種確認位置 (夏季)

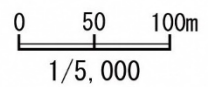


注) () 内の数字は、確認例数を示す。

図 9.8-6(1) 保全すべき種の確認位置 (魚類：夏季)

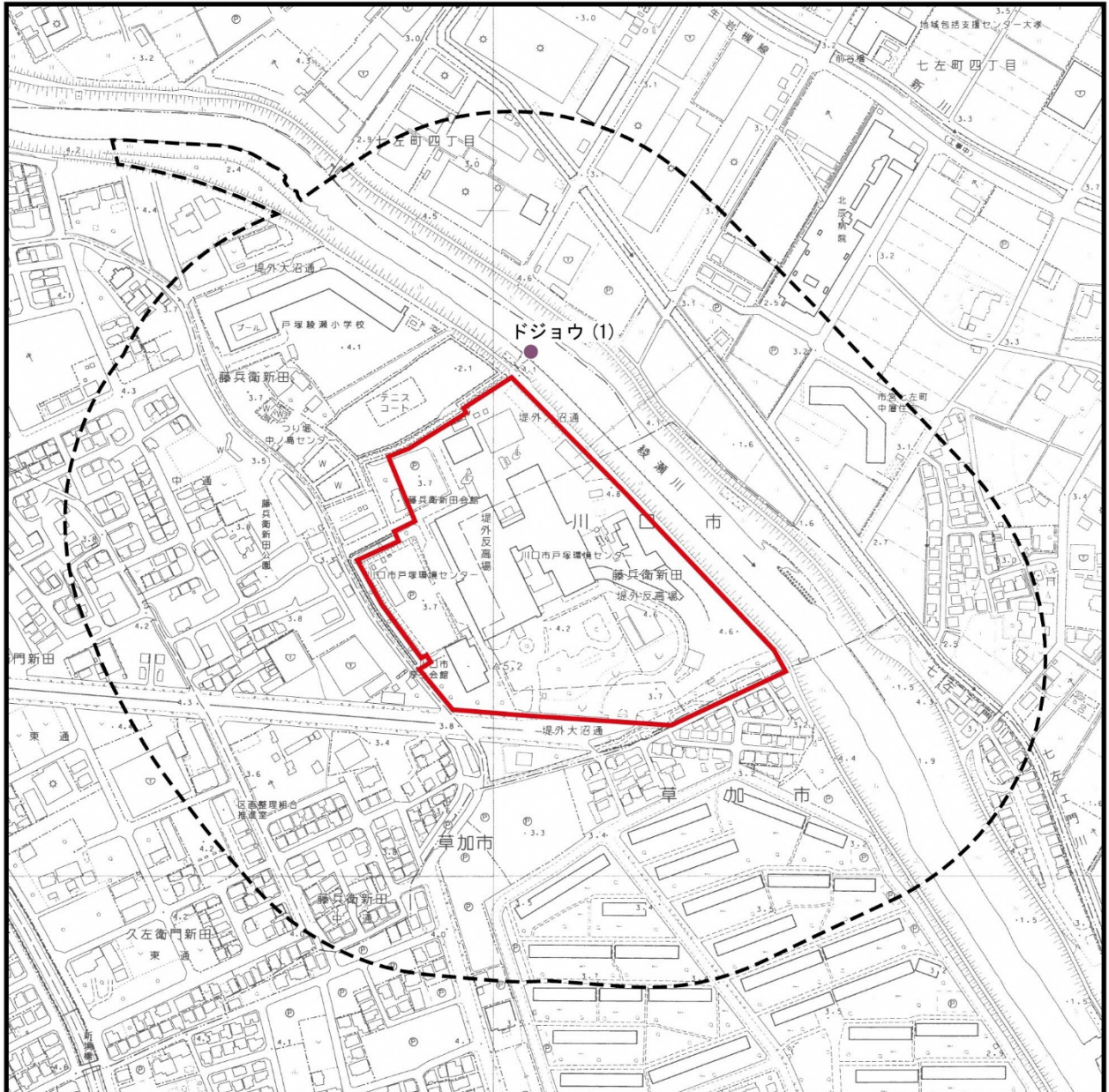


- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲
- : 保全すべき種確認位置 (秋季)

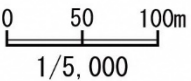


注) () 内の数字は、確認例数を示す。

図 9.8-6(2) 保全すべき種の確認位置 (魚類：秋季)

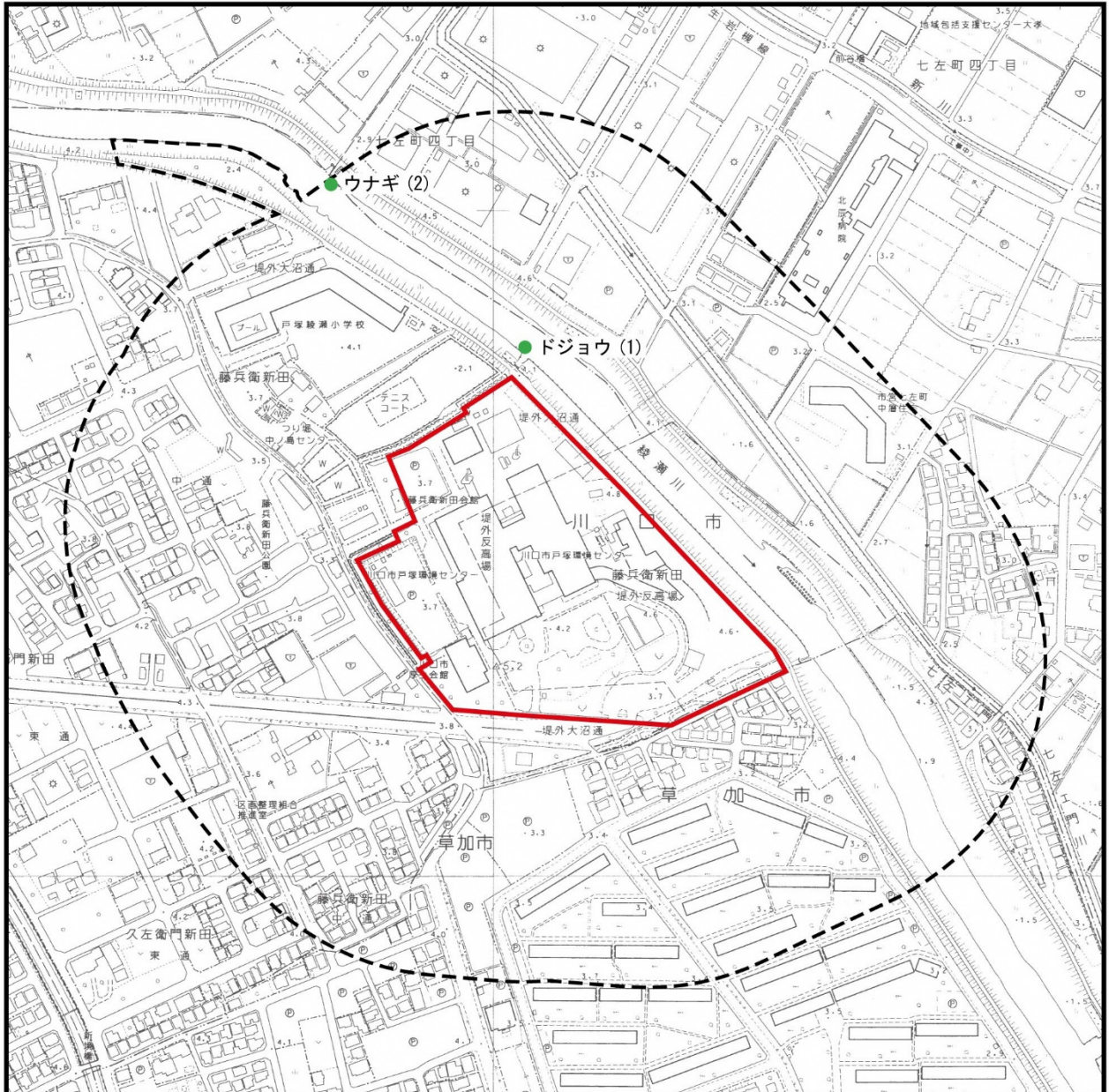


- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲
- : 保全すべき種確認位置 (冬季)

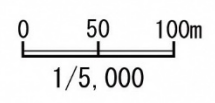


注) () 内の数字は、確認例数を示す。

図 9.8-6(3) 保全すべき種の確認位置 (魚類：冬季)





- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲
- : 保全すべき種確認位置 (春季)



注) () 内の数字は、確認例数を示す。

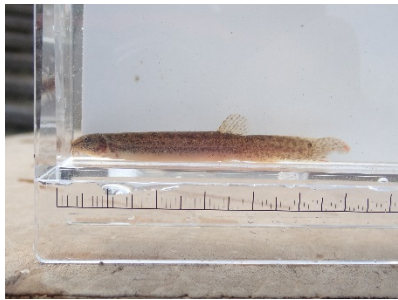

図 9.8-6(4) 保全すべき種の確認位置 (魚類：春季)

表 9.8-18(1) 保全すべき種の生態及び確認状況（魚類）

科名	ウナギ科		
種名	ウナギ		
重要性	文化財	—	
	保存法	—	
	環境省	絶滅危惧 I B 類	
	埼玉県	準絶滅危惧 2 型	
分布状況	北海道、本州、四国、九州、南西諸島		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】体の背方は暗色、腹方は白色もしくは黄金色で、体にまだら状の斑紋はない。背鰭起部は胸鰭後端と肛門の中間点か、それより後方にある。大きい個体は全長 110cm、体重 2.1kg にまで成長する。</p> <p>【主な生息環境】海域で一生を過ごす個体と、海域から河川に遡上し成長した後、産卵のために再び海域へ下る個体が知られている。海と川を行き来し、水田や池にまで遡上できるような河川環境が必要である。浮き石、植生、あるいは流れが緩やかな場所の石と石の隙間等で、隠れ場所となる生息空間が必要である。また、えさとなるアユ、エビ類や小魚等が豊富な水域に生息する。</p>		
県内での生息状況	荒川水系や利根川水系に分布する。荒川では寄居町の玉淀ダム堤体直下から下流の川口市まで分布。荒川では体色が透明なシラスウナギの遡上が確認されている。		
現地確認状況	春 季：綾瀬川（F-1 地点）左岸の水路の流れ込み部で 2 例が確認された。		



資料：「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）」（平成 30 年、埼玉県）

表 9.8-18(2) 保全すべき種の生態及び確認状況（魚類）

科名	ドジョウ科		
種名	ドジョウ		
重要性	文化財	—	
	保存法	—	
	環境省	準絶滅危惧	
	埼玉県	—	
分布状況	日本列島に広く分布		確認个体
形態・生息場所	<p>【形態】成長すると多くは全長 15cm 程度だが、20cm 近くの大型になる個体も見られる。体色は黒色や茶色のほか金色がかかるものまで見られ、体の模様も全体に暗色がかかるものや斑点が散在するものなど変化に富んでいる。ひげは 5 対 10 本あり、酷似するカラドジョウよりも明らかに短い。体色が金色がかかる個体であってもカラドジョウより金属のような光沢感がなく、背鰭から尾鰭までの体形も細長い。</p> <p>【主な生息環境】水田や池沼、水路、河川の中・下流等の多様な環境に生息する。</p>		
県内での生息状況	—		確認環境
現地確認状況	<p>冬 季：綾瀬川（F-2 地点）右岸の水路の流れ込み部で 1 例が確認された。</p> <p>春 季：綾瀬川（F-2 地点）右岸の植物帯で 1 例が確認された。</p>		

資料：「レッドデータブックとちぎ 2018 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物」
 （平成 30 年、栃木県）

表 9.8-18(3) 保全すべき種の生態及び確認状況（魚類）

科名	メダカ科		
種名	メダカ		
重要性	文化財	—	
	保存法	—	
	環境省	絶滅危惧Ⅱ類	
	埼玉県	準絶滅危惧2型	
分布状況	<p>本州（以下の各地：長野県（千曲川水系）、京都府綾部（由良川水系中・上流）、丹後半島竹野川水系、兵庫県竹野（谷田川水系）、鳥取県岩見（小田川水系）以西の日本海側（兵庫県浜田の岸田川水系を除く）、隠岐諸島島後、見島、盛岡（北上川水系）・大船渡（盛川水系）以南の太平洋側）。瀬戸内海の沿岸及び島嶼。四国。九州（本島および以下の各地：対馬、壱岐、五島列島福江島、天草諸島下島、甕島列島）。南西諸島（以下の各地：種子島、馬毛島、喜界島、奄美大島、加計呂麻島、伊平屋島、沖縄島、渡嘉敷島、久米島）。</p>		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】体側後半の黒色素胞は網目模様を形成しない。体側後方に染み状の斑紋がない。オスの背鰭の欠刻は深い個体が多い。全長約2～3cm。</p> <p>【主な生息環境】平野部の河川、池沼、水田、用水路等の水際帯に水生植物群落が必要である。農業用水では、本川からの導水により用水に入り込み、流れが緩やかな水際を遡上する。落水時に逃避もしくは取り残されて鳥類の餌となるほか、水が干上がり死滅する個体も多い。流域の湿地帯の消失や河川のコンクリート護岸化により生息域を失い、減少する傾向にあるが、護岸化後の水際に泥が堆積して植生が繁茂するようになると、そこを二次的生息地として利用する水域も見られている。</p>		
県内での生息状況	荒川、利根川水系に分布する。		
現地確認状況	<p>夏季：綾瀬川（F-3地点）の水際植生の根際で2例が確認された。</p> <p>秋季：綾瀬川（F-3地点）の水際植生の根際で1例が確認された。</p>		

資料：「埼玉県レッドデータブック動物編2018（第4版）」（平成30年、埼玉県）